様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１　年　５　月　２９　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００７　　～２００８
課題番号：19720049
研究課題名（和文）　中世文芸における花と自己変容―世阿弥能学論を中心に―

研究課題名（英文）Hana and self transformation in the Arts the the Middle Age

研究代表者 岩倉　さやか（IWAKURA　SAYAKA）
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：10448699

研究成果の概要：世阿弥の能学論を読み解いた結果、その根幹をなす思想、すなわち「花」とは「根源なるものの力（世阿弥の用語では「妙」）を、絶えざる自己否定を通じて宿し得た、演者の心とわざの総体」を射すのだ、という結論に至った。また、絶えざる自己否定という形での「自己変容」が、多くの謡曲の中で、シテの変容という形で示されていることを、作品論の中で示し、従来等閑視されてきた能楽論と謡曲論との有機的連関を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	240,000	1,140,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,700,000	480,000	2,180,000

研究分野：日本古典文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：中世文芸論・能楽論

１．研究開始当初の背景

世阿弥能楽論の研究にあっては、テキストの整備はかなり進んでおり、そのうちのいくつかの作品については、すでに詳細な注釈が試みられている。だが、それらの多様な研究にもかかわらず、現在の研究には、世阿弥の言葉・表現を一つの類稀な思想として捉え、さまざまな概念の全体的な意味構造を読み解くという視点が欠けていると言わねばなるまい。現在の研究状況が抱える主な問題点としては、次の２点が挙げられよう。

（１）　**能楽論の研究は、本来、歌論・連歌論などを視野におさめた上で、それらとの比較研究とともに進められるべきであるが、従来の研究にはその視点が欠けている。**中世の各分野の文芸論は互いに密接な関係にあり、これら全てを視野に入れた研究を行わなければ、個々の作品の正確な解明もあり得ないと思われる。

（２）　**中世文芸論の成立を支えた、天台**

本覚論、禅の思想を初めとした、日本思想史についての理解が不十分である。世阿弥作の謡曲の詞章や、能楽論の用語の淵源を、禅の用語に求める論文はこれまでにも数多く見られた。だが、能楽論そのものが生み出される時点にまで遡り、その中心にある思想を解明するためには、単なる用語の比較に留まらない、日本思想への理解が必要となるであろう。

以上の問題点を解決するためには、同時代の文芸論に共通してみられる思想を浮彫りにし、個々の作品を一つの大きな「中世文芸論史」の中で捉える視点が有効であると考えた。

２．研究の目的

そこで、本研究では以下の研究目的を掲げた。

（１）世阿弥能楽論を一つの思想として捉え、その全体的な意味を文脈に即して読み解く。

（２）能楽論を他の文芸論との比較において考察し、中世文芸論の全体像に見通しをつける。

（３）（１）で得られた知見を基盤として、世阿弥作の新たな解釈を試みる。

（４）近世俳論を、中世文芸との関わりにおいて捉え、新たな読みを提示する。

日本文芸論の一つの精華ともいうべき世阿弥能楽論を研究の軸に据え、最終的には、日本文芸論が共通して問い尋ねてきた、「心と言葉ともの」の関係について明らかにしてゆくことを目指した。

３．研究の方法

研究目的の達成のために、以下の方法をとった。

（１）世阿弥能楽論の本質的研究。

世阿弥の二十一部の伝書を吟味した上で、「幽玄」「花」「成就」といった主要概念の全体的な意味連関と、それらの普遍的な思想としての射程を考察した。その際には、それぞれの語が中世の歌論・連歌論の中でどのように使われていたのか、その語史的研究を論にまとめた上で、相互の連関を探った。

（２）世阿弥能楽論を視野に入れた上での、謡曲の主題についての考察。

世阿弥作の謡曲には、「無限なるもの（世阿弥の言葉でいえば「妙」「妙所」）にシテの心が開かれゆくことによって、一種の救いがもたらされる」という、一貫した傾向が認められる。そのことの意味を、能楽論が探究する「自己変容」との関連から考察した。

（３）近世俳論を、中世文芸論との関わりにおいて読み解いた。

従来解釈が困難であるとされてきた、「不易流行」「軽み」「しをれ」といった蕉風俳論の諸概念を、世阿弥能楽論の「序破急」「却来花」「萎れたる花」等に見られる〈表現と自己の変容〉の問題と同一のものとして捉えることで、新たな解釈を試みた。

上に述べた研究目的を達成する上で、本研究が打ち出した学術的特徴とは、文芸論で常に重要な概念として語られる「花」と、「自己の変容」という問題に焦点を絞って、考察を加える点にあった。

日本の文芸論において「花」とは、人が自然からの呼びかけに心を披いて応答したときの、いわばその表現の精髄を意味する言葉であった。そして、優れた文芸論においては、「花」に対する探究の眼差しは、そうしたよい表現を発する自己そのもののあり方にまで及んでいったのである。従って本研究では、鎌倉・室町時代の歌論や連歌論などとの、歴史的かつ本質的な連関を精査しつつ、中世における文芸論が共通して担っていた問題、すなわち、自然（もの）と心と言葉との根源的な意味連関、さらには自己変容と生の問題について探究してゆくことを目指した。

４．研究成果

課題が多岐にわたるため、以上の研究がすべて論文という形になったわけではないが、現時点では論文２本を成果として執筆し（うち一本は２００９年秋刊行予定）、また２００６年に脱稿した博士論文に、この二年で得た知見を加え、書籍化に向けて作業を続けている。

論文のうち、まず①「主になる心―「有主風」の意味を巡って」（国際関係・比較文化研究、第６巻、246－258、2007 年、）では、世阿弥能楽論の本質である、「無限なるものに向けて絶えず自己を否定しゆくあり方」を「妙」「有主風」という言葉をキーワードとして論じていった。

従来の研究では、「有主風」とは、「主体性のある演技」と訳され、その言葉を世阿弥の思想体系の中で位置づけようという試みはなされてこなかった。しかし、論者は、「主体・客体」「主観・客観」ということの内実を考察し、「主ある風」の意味を跡づけることは、世阿弥の言う「まことの花」「離見の見」を解明する上でも不可欠であると考えた。世阿弥のいうところの「主」とは、現在言うところの個性や個我といったものを超えた本来の「主体」、不可知なる「妙」を宿した本来の自己を意味した。そして、演者がその「主」に成り入るとき、すなわち己れを不知の境地に晒し、絶えずいまの自己の態を否定してゆくとき、演者のすべての態は「一心」を紐帯として新たな命を持って甦ってくる。その状態をこそ「有主風」と呼んだのであり、そうした否定の論理に支えられて、初めて、舞台上の演者は、心と態とが真に充実した「花」ある姿となるのではないだろうか。そして、はじめに掲げた『拾玉得花』の世阿弥の言葉のように、演者が一つのわざを完成・成就させたとき、演者に引き入れられる形で、その心を、「主」である「妙」の境へと導かれるのであり、そこに一座の感応も生じるのだと思われる。

また、以上の考察の中で、「主」である「妙」の境への一致とは、謡曲の中にしばしば見られる、「神仏との交感、それに伴うシテの変容」の問題に深く関わる事態であるということに触れた。これを受けて論じられたのが、論文②「謡曲『熊野』の思想」（「山櫻」２号、２００９年秋刊行予定）である。本論文では、謡曲『熊野』の終曲でシテの熊野（ゆや）が発する言葉である「観音の御利生」とは何を指すのか、ということについて考察した。『熊野』は、平家の棟梁平宗盛に寵愛されていた遊女である熊野が、京の花のもとで舞を舞い、落花を受けて「いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん」という和歌を詠んだことによって病気の母の待つ故郷へ帰ることを許された、という話である。従来の研究では、「観音の御利生」とは、「観音の力によって帰郷を許されたこと」といった、きわめて曖昧な解釈しかなされてこなかった。しかし、この「御利生」の内実に踏み込まなければ、暇を与えることをかたくなに拒んでいた宗盛がどうして帰郷を許したのか、ひいては、かたくなに対立する二人の心が、なぜ和するようになったのか、という曲の主題が見えなくなってしまう。そこで、本論文では、「心が変化したのは宗盛だけではなく、シテの熊野の変心、変容こそが肝要なのだ」という視点から、一曲の詞章を丹念に取り上げ、シテの熊野の心情の変化を捉えていった。その中で、以下のことを明らかにした。

（１）自己にとって切実な問題であったとしても（母の病、母との別離）、ある限定された存在〈母〉のみを絶対的な価値としたとき、そこに救いはあり得ず、他者（宗盛）との融和もあり得ない。

（２）日本において、あるいは日本の文芸で描かれる作品世界において、神仏は自然に宿り、その自然を目で捉えることで、最初の神仏との交感がなされる。
（３）神仏に祈ること、神仏に対し舞や歌を捧げることで、神仏から受けたものを返し、それによって神仏から新たな力を与えられる、という交感による力の循環、それに伴う力の増大ということが起こり得る。
（４）そうして生まれた和歌には、詠み手と他者との融和を促す力がある。言い換えれば、人と人とは本来、無媒介に融和するのではなく、神仏を介してはじめて和することができるのである。
　以上のことから、「観音の御利生」とは、帰郷という具体的な結果を指す以上に、ある限定的な価値を絶対としている自己から、観音をよりどころとして生きている自己、観音の力を受け、守られ得る自己へと変容してゆくことそのものを指すのだ、という結論を得た。このことは、舞と歌で構成される能という芸能そのものの持つ意味を考える上でも、一つの示唆を与えるものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計２件、うち１件掲載予定）
・〔雑誌論文〕（計２件、うち１件掲載予定）
①岩倉さやか「謡曲『熊野』の思想」、山櫻、第２号、文字数約 16000 字、2009 年秋刊行予定、査読無し
②岩倉さやか「主になる心―「有主風」の意味を巡って」、国際関係・比較文化研究、第６巻、246－258、2007 年、査読無し

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
・静岡県コンベンションセンターグランシップのアウトリーチ事業に協賛する形で、２００９年１月、大倉流小鼓方１６世宗家大倉源次郎氏を招き、静岡県立大学にて講演会「小鼓の魅力」を開催、能楽の普及に貢献した。

６．研究組織
(1)研究代表者
　岩倉　さやか（IWAKURA　SAYAKA）
　静岡県立大学・国際関係学部・講師
　研究者番号：10448699
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし